
艦魂の歌 ??リバチー半島のかなた??

米問屋のひ孫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

艦魂の歌　???リバチー半島のかなた??

【Nコード】

N2695K

【作者名】

米問屋のひ孫

【あらすじ】

第二次世界大戦、東部戦線ではソ連軍がドイツ軍と熾烈な戦闘を繰り広げていた。その初頭、連合国からの支援物資無しには戦線の維持が難しい状態へと陥ったソ連だが、最大の支援ルートであるイギリスとソ連を結ぶ北極海ルートはノルウェーを占領したドイツ軍によって攻撃に晒されていた。

これはドイツ軍の攻撃から支援物資を運ぶ船団を護るべく戦ったソ連の駆逐艦グレミヤーシチイの艦魂とその航海士の物語である。

第一話：賽は投げられた（前書き）

割り込み投稿：2012/01/02

第一話：賽は投げられた

猛吹雪の中を船団が進んでいた。イギリスのロツホ・ユーからアイスランドのレイキヤビクを経由し、ソ連のムルマンスクへと向かうPQ13船団である。

数日前から続く吹雪やら霧やら暴風やらで船団はばらけて二つに分かれ、独航する船も出てしまう有様であつたがそれでも遮二無二ムルマンスクへと向かつていた。船団の積荷は戦車や航空機、機関銃から缶詰、衣類まで多岐にわたる。

資本主義国、しかも君主制の国であるはずのイギリスが共産主義国の親玉たるソ連に物資どころか兵器まで送る。どうしてこんなことになったのかといえ、一九四一年六月二十二日までさかのぼる。

その直前までは第二次大戦の戦渦が欧州を巻き込んでいる中を、ソ連はかるうじて平和を保っていた。これまた共産主義とは相容れないはずのファシズムを標榜するナチス・ドイツと手を組みポーランドを分割、ポーランド人相手に好き勝手弾圧してはいた。しかし、フランスまで蹂躪したドイツとイギリスが戦争しているのを腹の中ではいろいろ企みながら傍観するだけであつた。

しかし、その六月二十二日にナチス・ドイツはバルバロッサ作戦を発動、突如として独ソ不可侵条約を破りソ連へ侵攻した。

ドイツ軍の攻撃を全く予期していなかったソ連軍はスターリンが行った大粛正の影響などによる指揮系統の混乱や、軍上層部の戦争遂行能力の欠如により各方面で次々に防衛線を破られた。また冬戦争でソ連に奪われた領土の奪還を目指すフィンランドもドイツに呼応してカレリア地方に侵攻した。

快進撃を続けるドイツ軍はわずか二ヶ月でソ連第二の工業都市かつ旧首都でもあるレニングラードにまで到達、これを包囲した。その後もウクライナ地方の古都キエフや第三の工業都市ハリコフが瞬

く間に占領され、ソ連の命運は尽きたかに見えた。が、ソ連はドイツに占領されるよりも先に工場をウラル山脈の東に疎開させることに成功した。そのおかげで一時的に生産能力が落ちるのは不可避ではあったものの、長期的に見れば持久戦に必要な生産能力の確保には成功したのである。

しかし質で圧倒するドイツ軍に対してソ連軍は量で対抗する他は手だては無いため、ソ連の持つ工業生産能力は戦車や戦闘機、銃のような兵器及び武器に重点的に割り振られ、民生品はともかく、トラックや機関車のような輸送用機械や冬には必需品のはずの軍用防寒着でさえ不足が目立っていた。

そこで対ドイツを旗印に手を組んだイギリス、アメリカを始めとする連合国はドイツ軍の矢面に立たされ悲鳴を上げているソ連の要請を受けて物資を送ることに決定、そこで編成されたのが一連のPQ船団である。

この船団はイギリスで物資を積み込むとアイスランドを経由して北海、バレンツ海を通り、ソ連領にある極北の港町ムルマンスクやアルハンゲリスクで積荷を降ろす。ソ連からは豊富な金属資源のお裾分けをしてもらって帰る。帰り道の船団はQP船団と呼ばれる。

もちろんのことながらドイツもそんな邪魔者を見過ごそうとは思わない。

ノルウェーに陣取ったドイツ軍はあらゆる手段でPQ船団およびQP船団の妨害を行うこととなった。

そして、このPQ13船団。途中まではキング・ジョージ五世級戦艦『キング・ジョージ五世』、『デューク・オブ・ヨーク』、レナウン級巡洋戦艦『レナウン』、イラストリアス級空母『ヴィクトリアス』などを始めとした極めて強力な護衛艦隊が付いていたのだが、今は彼らも引き返してしまった。残ったのはクラウン・コロニー級軽巡洋艦『トリニダード』とE級駆逐艦『エクリプス』、F級駆逐艦『ファアリー』だけ。それも悪いことに護衛すべき商船隊はどこ

にも見えない。はぐれてしまったのだ。

そしてもつと問題のあることにノルウェーのトロンハイムからビスマルク級戦艦『ティルピッツ』が出撃したとの報も入っていた。『ティルピッツ』は約一年前に起きたデンマーク沖海戦でイギリスの誇る巡洋戦艦『フッド』を一撃で返り討ちにし、先に極東で撃沈されたキング・ジョージ五世級戦艦『プリンス・オブ・ウェールズ』を撃破して撤退させた挙げ句、続くビスマルク追撃戦では戦艦二隻、重巡洋艦二隻の敵艦隊と一時間半近くも砲撃戦を演じて北海に消えた『ビスマルク』の姉妹艦である。

そんな怪物じみた性能を持つ戦艦が出撃したのに頼みとしていたロイヤル・ネイビーの戦艦や空母はいない。残ったのが先ほどの軽巡洋艦一隻と老朽駆逐艦二隻。

商船の乗員は口々にこう言い合った。

「こないな護衛付けてもうても、戦艦と出つくわしたら三十分もせえへんうちに海の底で仲良うおねんねやで」

「いや、十分もかからんよ。ま、あの世でもよろしく頼むぜ。この船団の番号が十三の時点で覚悟はしたさ」

そして二十五日には最後の頼みの綱の護衛隊もはぐれてしまい、商船隊は恐怖の海を急ぎ足で駆け抜けようとしていた。

一九四二年三月二十七日。

護衛隊は必死に商船を探していたが、一口に北海と言えどそれは広い海である。そう簡単に目的のものを見つけれられるわけではない。電波を出して集合でもかけようものなら商船は集合するだろうが、敵の爆撃機やUボート、戦艦まで集合してしまう。護衛隊は互いに相手を見失わない程度に散らばり、商船を必死でかき集めていた。

その時である、水平線に怪しい陰が現れた。黒い点が二つ。

黒い点はぐんぐん近づいてくる。レーダーには二隻の船が映っている。

商船かと思つたが、速さが全然違う。並の駆逐艦よりもまだもう

少し速いように感じられた。敵の前衛を務める駆逐艦かもしれない。艦橋に緊張が走る。

実は思い当たることがある。今朝、商船隊を集めている最中にドイツ軍の奇妙な飛行艇が霧の中から現れ、船団の周りを数度かぐるぐる回るとまた帰って行つたのだ。飛行艇から連絡を受けたドイツ軍艦艇なのかもしれない。

スピーカーから警報が鳴り響き、艦内の廊下を乗員の足音が支配する。各々の備砲が怪船を睨み、『トリニダード』の連装砲塔はまづ右に旋回、それから砲にうんと仰角をかけた。

乗員達が攻撃命令を今か今かと待っていたその時、怪船からちかちかと光が発せられた。

「や、イワンだ！」

誰かが叫ぶと共に、信号兵が発信された艦名を伝える。

「ソ連海軍の駆逐艦『グレミヤーシチイ』と駆逐艦『ソクルシーテリヌイ』だそうです」

ともあれ戦闘準備は解除され、非番の水兵はやってきた味方を迎えようと喜び勇んで甲板に出る。

しばらく後、ソ連の駆逐艦二隻が護衛隊に加わった。各艦歓迎するが、ソ連の駆逐艦の甲板には人がほとんど見あたらない。何人かが艦橋近くで帽子を振っているが、それが以外はひっそりと静まりかえっている。

「なんだいありやあ、幽霊船みたいだな」

「うむ。せつかく来てやつたのにああまで愛想がないとは思わんかったよ」

『トリニダード』の艦橋でもぶつくさと文句がこぼれている。

ソ連から派遣されている連絡将校は気まずそうに艦長へ囁いた。彼ももとは眼前を走るあの駆逐艦に乗っていたことがあるのだ。適当に理由をつけて戦友たちを庇おうと企図した。

「あんまり外に出てはならんというお達しが来てるんですよ。こっちの海は荒いでしょう。たまに海に転げ落ちる馬鹿な水兵が出ます

んでね」

「ふーむ、それなら外に出て欲しくないな」

艦長はにやりと笑った。

三月二十八日。

PQ13 船団に所属しているパナマ船籍の商船『レイスランド』
はノルウェーの北岬から百十マイルほど北東を航行していた。ノル
ウェー人の船長、スヴェレ・ブレッケは船橋に立ってシケた煙草を
口にくわえ、前の海を眺めていた。

ブレッケは五十三歳、ノルウェー人で頑丈な男である。船員一筋
で人生の駒を進め、サウザン・アトランティック・ラインの運行す
る四千トン級の貨物船『レイスランド』の船長となったが、船もろ
とも徴用されて今に至る。

『レイスランド』は一九一〇年にイギリスのグラスゴーで建造さ
れた四千トン級の商船で、ソ連向けに戦車や航空機、トラックから
防寒着や食料まで、いろいろな物資を積みこんでいた。こうすれば
たとえ目的地にたどり着けない船が出て、ある一品だけがまった
く届かなかったなどという事態は生じない。そしてこれは予定だが、
帰り道は代金としてソ連から金塊やらを頂いて帰るのである。

この船はバレンツ海の荒れようには全くの無力であった。舳先が
うんと持ち上がったと思うと、今度は波の谷間へまっしぐらに落ち
込み、ついでに前転でもするかのように船尾が持ち上がる。

船長の口から煙草が落ちた。

煙草の断面には歯形がついている。あまりの揺れに持ちこたえよ
うとして、煙草を噛み切ってしまったのだ。ブレッケは惜しそうに
煙草の切れっ端を見つめ、それをつまむと灰皿に放り込んだ。

「やれやれ……ムルマンで煙草は買えるんかねえ……」

暴風が吹きすさび、海面は沸き立つ。ブレッケのつぶやきは自然
の猛威にかき消された。大波が『レイスランド』に叩き付けられ、

やはり船ごと徴用された船員のゲオルグ・ゴッドフレッドセンは悪態をつきながら、双眼鏡を握ったままでもんどりうって転げた。

「ゲオルグさん、交代です」

ゴッドフレッドセンは頭を掻きながら立ち上がり、いつのまにやら後ろに立っていた同僚のアスビヨルン・オラフセンと交代した。オラフセンはまだ二十三歳、船ごと徴用された船員の中では最も若手だった。

「しっかりやってくれや、アスビヨルンさんよお」

「大丈夫ですかねえ……？」

ブレッケはオラフセンの肩を叩いた。

「いつも通りで大丈夫だ。緊張すんなよ？」

「わ、分かってますよ船長」

「なあに、『テイルピッツ』が来たら白旗あげて、荷物差し出したらいいさ」

ブレッケは冗談めかして言うと、引き攣ったように笑った。

しかし、この時既に護衛なき商船は悪夢の始まりへと踏み出していた。

前日の朝、Bv138飛行艇が船団を発見したわけだが、Bv138から船団発見の報を受けたドイツ軍の司令部では潜水艦『U-435』『U-436』『U-454』『U-456』『U-585』『U-588』を出撃させ、駆逐艦『Z24』『Z25』『Z26』からなる第八駆逐艦隊に出動準備を整えるよう下命した。Ju88やHe111といった爆撃機がノルウェー北部から飛び立ち、爆弾を満載して獲物はいないかと飛び回っていた。

ドイツ軍のJu88中型爆撃機の編隊が吹雪の中を飛んでいた。燃料はまだまだたくさんある。隊長機の機長は燃料計を見てうなずいた。

その時だった。突然吹雪が止み、視界が開けた。

「機長、船影が見えます！」

「よし、確認しろ。うむ……まあ気をつけろ」

「了解！」

確かに船が前方にいる。

オラフセンは双眼鏡で海面を舐め回すように見ていた。ブレッケもやはり双眼鏡を両手に、煙草を口にして心配そうに見回している。水平線を見ようとしても霧や雪、波の飛沫で見えない。狭い視界の中で見える海面には他の商船や味方の艦艇は見えない。陸地も見えず、もちろんのことながら敵の戦艦や巡洋艦も見えない。

「潜望鏡一つ出てきませんね」

「バカヤロ、出てきてたまるか。縁起でもない」

ブレッケは不機嫌に怒鳴った。

そのとたん。

急に風が治まり、霧も晴れ始めた。ただ、波は荒い。

「や」

ブレッケは呟いた。

オラフセンは双眼鏡を放り出して逃げた。

「取り舵いっぱい！」

ブレッケは喚く。操舵手が舵輪を力一杯に回す。

重い低音を響かせてJu88が真上、それも船橋すれすれを飛び去る。偶然船橋にやってきた船艙員サミュエル・ヒックマンは「ひやあ！ クラウツヤ！」と悲鳴一声、逃げ出した

Ju88の編隊は『レイスランド』を敵の輸送船と確認したらしく、空中でゆったりと旋回すると超低空を這うように飛んできた。自衛手段を全く持っていない『レイスランド』のほんの三十メートルほど上をフライパスするや否や、数発の爆弾をばらまいた。ブレッケは操舵手に向かって何事かを叫んだが、巨大な水柱のあがる音、そして爆音にかき消された。

一発は甲板に大穴を穿って積み荷の戦車を何台か吹っ飛ばし、も

う一発が舷側を破った。

ブレッケは慌てて伝声管に駆け寄った。が、その視線は悠々と飛ぶJu88に注がれている。

「オラフ！ 大工のオラフ・デール！ 至急損傷箇所へ向かえ！」
しかし、呼ばずとも状況は既に最悪の方向へと突き進んでいた。

『レイスランド』は徐々に傾きだし、煙突から吐き出される煙は弱々しくなっていた。機関室にまで浸水してきたので機関員達は這々（ほうほう）の体で、さっそく救命胴衣を着て甲板へとあがってきた。Ju88はひどく満足げに、もちろん飛行機から感情などは伺えないが、ブレッケにはそう見えた。飛び去って行った。

水浸しかつ血まみれになって船橋に上がってきた大工のデールも首を横に振った。

「あんなものの修理は無理でさね、船長。早く逃げねと船と一緒にお陀仏でさあ」

もはや『レイスランド』は航行不能である。ブレッケは四十五人の乗員全員を集めると船体の放棄を宣言し、救命ボートをおろすように命令した。

積荷の燃える臭いの中、乗組員達は必死に救命ボートの用意をする。船の傾斜のおかげで邪魔になっていた戦車を海に突き落とせた。そして、どうにかこうにか救命ボートをおろす。怪我人が数名いたが、幸い誰も死んではない。何隻かの救命ボートに分乗して、全員が傾いている『レイスランド』を脱出した。

ブレッケも最後に救命ボートに乗ったが、とんでもない事に気付いて喚いた。

「おい！ 誰か積荷の缶詰取ってこい！ ボートの上で餓死しちゃうぞ！」

どのボートも『レイスランド』から離れようとしていたが、そのオール動きがはたと止まる。皆もと来た方向に急いで戻る。『レイスランド』はまだ傾きながら浮いている。何人かが『レイスラン

ド』に飛び乗って、船艙から次々に缶詰の詰まった箱を持ち出した。めでたく食料や水の確保も出来たところでまたオールを漕いで離れようとした。ブレッケはボートの上に立ち尽くし、『レイスランド』を潤んだ目で見つめていた。

その後、嵐が襲った。救命ボートは離ればなれになり、あるボートの乗員達は近くを通りがかったUボートに収容された。

また別のボートはノルウェーに辿り着き、街で徘徊しているところをやはりドイツ軍に収容された。

合計十六名。四名が亡くなったが、ノルウェー人やデンマーク人が多かったため、彼らはヴィルヘルムスハーフェンなどにある収容所などを経由して後にドイツ軍占領地内にある家に返された。ゲオルグ・ゴッドフレッドセンもその幸運な一人である。もちろん、アメリカ人やイギリス人などドイツの敵国籍を持つ船員は抑留された。しかしブレッケ船長や船員のアスビヨルン・オラフセン、大工のオラフ・デールら二十九名は極寒の、そして鉛色のバレンツ海に消えた。

一九四二年三月二十九日。

ソ連の駆逐艦二隻と合流したPQ13船団はムルマンスクへ向かって航行していた。

この時点で護衛隊とはぐれて独航していた貨物船の『レイスランド』『エンパイア・レンジャー』が爆撃機に撃沈されている。

またこの日の未明にはドイツ軍の駆逐艦『Z24』『Z25』『Z26』から成る第八駆逐艦隊は貨物船『バトウ』と出くわし、これを撃沈していた。

しかし、船団側にもちよつとした光明はある。イギリス軍がムルマンスクに送り込んでいた八百トン級の掃海艇四隻が加勢に駆けつけ、はぐれた商船や撃沈された船の乗員の搜索に乗り出していた。

朝九時。

船団の前方からまたもや怪しい陰が現れる。

先導していたソ連の駆逐艦『グレミヤーシチイ』『ソクルシーテリヌイ』を軽巡洋艦『トリニダード』と駆逐艦『エクリプス』が追い抜く。

今度こそドイツの駆逐艦であつた。

が、いざ戦おうとすると、猛吹雪が到来した。たちまち視界から駆逐艦が消える。『グレミヤーシチイ』は商船隊のところへ戻つて煙幕を展開し始めていたが、とんだ無駄足と言つても良い状態になつてしまつた。

猛吹雪の中からヌツと現れた敵に『トリニダード』の主砲が火を噴く。『エクリプス』も『トリニダード』の援護に回るが、ドイツの駆逐艦隊も激しく応射してたちまち水柱に囲まれる。

反航戦なのですぐに敵味方が入れ違い、またもや英軍は吹雪の中に敵を見失う。

艦長は仕方なく、「打ち方止め」を命令した。

鳴り響いていた砲声は雪の中へと消える。舳先が波を切り、煙突からはいつも通り煙が上がる。駆逐艦隊が消えた方向を乗員達は不安そうな顔で見つめていた。

またもや、今度は逆方向に駆逐艦隊が現れる。『トリニダード』の主砲塔が回転する。

艦長は叫ぶ。

「打ち方始め！」

駆逐艦隊の周りに水柱が立ち、先頭を走っていた駆逐艦から火の手が上がる。状況は護衛隊に味方した。火の手で識別しやすくなつた敵に砲撃を集中させたが、それが代将旗を掲げる『Z26』であつた。

火の手を上げる『Z26』は『トリニダード』に集中攻撃されていた。航行能力を失い、いまや霧の中を漂うのみ。そして満を持し

て『トリニダード』は『Z26』へ向けて魚雷を放つ。

一方、駆逐艦『エクリプス』は残る二隻を追って霧の中を彷徨う。そして霧を衝いて聞こえてきた爆音の方角へ向かうと『トリニダード』が火災を起こして傾きつつある。そしてその前には『Z26』がやはり火災を起こして漂っている。『Z26』の最期の悪あがきが『トリニダード』に痛手を負わせたに違いなかった。『エクリプス』はもはや風前の灯火であつた『Z26』にとどめを刺して葬つた。

一方蚊帳の外に置かれたソ連の駆逐艦『グレミヤーシチイ』でも困惑が広がっていた。砲声はすれど、敵も味方も見えない。僚艦の『ソクルシエリヌイ』も吹雪の中に消えてしまい、姿はない。艦長のアントン・ヨシフォヴィチ・グリーン中佐も首を傾げていた。

「こりやあ全く見えんな」

そう呟いたその時、見慣れない駆逐艦が前を横切った。突然のことに、どちらも反応できない。グリーン中佐は咄嗟に「撃て！」と叫んだものの、放たれた砲弾はむなく吹雪の中へと消えた。当たったのか外れたのかすらも分からない。

砲声が轟き、霧を引き裂くような炸裂音が聞こえるがどうしようもない。防盾があるだけで、あとは吹きさらしの備砲に乗員たちはかじりつき、前方を睨む。雪はヘルメットの上にも容赦なく降り積もり、制服の袖は波の飛沫で凍り付いている。

吹雪が止んだ頃には既に決着は付いていた。『Z26』は沈み、僚艦の『Z24』と『Z25』は戦闘海域からしつぽを巻いて逃げ出した。が、軽巡洋艦『トリニダード』が魚雷を食らって大破していた。

しかし、もう目的地ムルマンスクへは近かった。爆撃機をどうにか撃退し、Uボートに爆雷を浴びせて一隻を撃破、翌日までには船団のほとんどが目的地へ到着した。が、独航していた商船の『イン

デユナ』と『エツフィンガム』は互いに助け合いつつ流水の海を越えようとしたが、Uボートに発見されてそれを果たせずに消えた。

そして、ムルマンスクもはや安全ではないことが、月もあけた四月から早速船団の乗組員たちに思い知らされることとなる。

第一話：賽は投げられた（後書き）

資料をかき集めていたら『レイスランド』の乗員の詳しい話を見つけたので書きました。調べてたらブレッツケ船長が「パールギョント」的なので私には泣けました。

この人にもソルヴェイグみたいな存在がいたのだろうかとか考える……。

第二話・極夜は去りゆき（前書き）

最終更新：2010/08/27

第二話：極夜は去りゆき

朝を迎えた軍港の上空をどんよりとした暗い空を低く垂れ込めた雨雲が覆っている。ぼしゃぼしゃと大粒の、凍りつくように冷たいみぞれが地面を打つ。

ここは世界最北の不凍港、ムルマンスク。北極圏内最大の都市でもある。

モスクワよりもさらに二千キロ近く北にあるこの都市だが北の海を流れる暖流の北大西洋海流の影響で海は凍らない。つまりそれほど寒くは無いのだが、それでも四月初めの今でさえ最高気温は十度前後で、最低気温はマイナス十度後半に達する。

ソ連北方艦隊所属の駆逐艦『グレミヤーシチイ』はその身を栈橋に横付けして休めていた。

この駆逐艦は七号計画型駆逐艦、またはグネフヌイ級駆逐艦として知られる艦級の二番艦である。同時期に就役した他国の駆逐艦に比べて大型で、設計にはイタリアの影響が強い。

その『グレミヤーシチイ』の士官室で同僚達との打ち合わせを終えて一人海図やコンパスの片付けをしていた航海士のミハイル・ロマノヴィチ・ウリリフ中尉は珍しく艦魂が見える人物であった。

彼と艦魂と呼ばれるものの付き合いは海軍軍人となってすぐに始まった。彼はバルト海艦隊の工作艦『セルプ・イ・モロト』で初めて艦魂と言う者を見たのである。時に、彼は少尉候補生であった。

その艦魂はイギリス生まれで、経歴も運送船から通報艦、仮装巡洋艦、病院船と多岐にわたる変わり者だった。「私、一度死んだことがあるのだけど」が口癖だったが日露戦争時にポルト・アルトゥール（旅順）の太平洋艦隊に所属していた大型艦船の中で唯一の生

き残りとのことであつた。病院船だつたが赤十字社の手違いから日本にはそのことが知らされなかつた為に砲撃を浴びせられて擱坐し、日本に引き上げられて一時は通報艦としてその海軍に所属していた。後にロシアに返還されたが干渉戦争中に再び日本に鹵獲された経験もあるとのこであつた。

イギリス人らしく、またその豊富すぎる経験に裏打ちされた辛辣なブラックジョークを吐く艦魂だつたが二年前に北方艦隊に転属になつた際に別れを告げた。風の便りに聞いた所によると『セルプ・イ・モロト』は去年のリガ湾からの脱出作戦の最中にドイツ軍に撃沈されたとのことである。

その今は亡きセルプ・イ・モロト曰く「艦魂が見える人間は一般的に水兵に比してある程度は暇な時間を持つ士官階級に多い。そしてその中でも『迷信深い』者は艦魂を見やすい」などと解説していた。

なるほど、艦魂は各艦に一人ずつ存在し全員の姿が女性である。

軍艦に宿る精霊みたいなもので進水の際に誕生し、その艦が沈んだり解体された時に死ぬとのことだ。

しかし彼女達を見ることが出来る者は少ない。その理由を彼女に聞くと先ほどの答えが帰つて来た。ニヤニヤ笑いを浮かべながらだつたのでたぶん理由は別なのだろうが、今となつてはそれを言つた本人が海底で永遠の眠りについてしまつていたので真意を知る由は無い。

ウリリフが考え込んでいると後ろから声がかけられた。

「賢いソ連人の掟。それは考えるべからず。考えたなら、しゃべるべからず」

灰色のウシヤンカ（耳当てのついたロシアの毛皮製の帽子）を被り、びしょ濡れの黒い外套を着た長身の女が立っていた。焦げ茶色の髪の下から覗く白い肌と茶色の瞳、そして右目を覆う黒い眼帯が

目につく。開戦初頭の爆撃で二五〇キロ爆弾を食らった時に右目を失ったのである。艦魂と言うものは分身が修理されたいがい傷は治るらしいが、どうもこれだけは運悪く治らなかつたらしい。

「なんだグリーチャか。驚かすなよ」

「私は念のために警告しただけだ。気を付ける。政治将校「ミルサーン」に余計な疑念を与えるな」

そう言うグリーチャことグレミヤーシチイは脱いだびしょぬれの外套を「艦魂の力」とやらで消し去った。外套を包んだ光がぱつとはじけるとそこには何も無くなっているのだ。濡れた服を乾かすのに苦労しているウリリフには羨ましい限りである。

「だが、肅清なんて昔の話だぞ」

小声でささやくウリリフだが、グリーチャは薄いある種の酷薄な笑みを浮かべると呟いた。

「甘いな、ミーシャ（ミハイルの愛称）。あの『グルジアの髭親父』がロシアの大地に君臨する限り恐怖は終わらない」

ウリリフは苦勞性である。彼女がスターリンのことを『グルジアの髭親父』だの『チフリスの田舎者』と言うたびに辺りを見回さずにはいられない。市井「しせい」の人々はともかくとして、軍の人間は大多数が内心ではスターリンのことを嫌っているが下手なことを言つて政治「ミルサーン」将校にでも聞かれたらことである。

ちなみに彼女にかかればスターリンの右腕として恐れられるNKVD（ソ連の秘密警察）長官のベリヤも『グルジアの気持ち悪い眼鏡』である。心配性のウリリフには刺激が強すぎる。それでも彼女は「奴らには私の言葉は聞こえないし、いくらNKVDでも『この駆逐艦はファシストの手先だから撃沈処分』なんて言うわけない」とお構いなしであつた。

確かにそう言われればそうだし、爆撃機を叩き落したり潜水艦に爆雷を浴びせたりと逆に表彰でもされそうなほどの戦いっぷりを見せる『グレミヤーシチイ』だが、それでもウリリフには心臓が止まりそんなほどのショックを与えるのだ。

ウリリフが丸めた海図を脇に抱えて自室に歩き出すとグリーチャもついてきた。ウリリフは口をつぐみ、グリーチャも何も言わない。途中で明日の天気について大論争をしている飲んだくれた三人組の水兵とすれ違い、敬礼を交わしたが人の気配はそれっきりである。自室につくと急いで扉を閉め、ウリリフはほっと溜め息をついた。

ソ連は艦魂が見える人間にとってはつらい国である。艦魂が見えない人間からは艦魂と話している人間は独り言を言っているように見えるのだがそれがよくない。襟元に仕込んだ隠しマイクで敵に情報を与えようとしていると言われたらおしまいである。そうなればマイクが見つからなくてもその人間は『ファシストの手先』やら『ソ連の破壊を企む民族主義者』やらとの罪状を着せられて収容所^{ラーゲリ}で十五年近い労働をしなければなくなる。その上、もし労働教化刑十五年の刑に処されたとしても十五年で帰ることができれば極めて幸運である。こんなアネクドートがそのことを顕著に示している。

ゴリコフは労働教化刑十五年を宣告され、二十年間服役し、幸運にも刑期を残して釈放された。

被っていたウシャンカを「カ」で消したグリーチャはスチームヒータの前に陣取った。舷窓のガラスをみぞれが音を立てて叩く。煙るみぞれの向こうにイギリスの軽巡洋艦『トリニダード』が大きなシルエットを浮かび上がらせて停泊していた。

軽巡洋艦『トリニダード』はPQ13船団の護衛としてイギリスからアイスランドのレイキャビクを経由してムルマンスクにやって来たのだがいつものごとく途中でドイツ軍に発見された。そして三月二十九日に船団の前方を航行中に接近してきた三隻のドイツ海軍

の駆逐艦と交戦、一隻を撃沈していた。それだけなら良かったのだが、こともあるうに自艦の発射した魚雷を食らって船腹に巨大な穴を空けられていた。寒さで故障した魚雷がブーメランのごとく綺麗な円を描いて戻ってきたのである。

この時『グレミヤーシチイ』はPQ13船団の後衛として船団の保護にあたっていたが直接砲撃戦には参加しなかった。が、ムルマンスクからレイキャビクを経由してイギリスへ行くQP9船団の護衛中の三月二十二日に嵐に巻き込まれ、古傷のせいで上部構造物に深刻なひび割れを生じていたにも関わらず二十四日には修理もしいまま船団の保護にあたっていた。それだけでなく幾度となくノルウェーのトロムソやスタヴァンゲルにあるドイツ軍の空軍基地から幾度となく飛来する爆撃機や雷撃機、哨戒機を相手に対空射撃を実施して戦果を挙げていた。三月三十日には輸送船『エッフィンガム』と『インデユナ』が潜水艦に撃沈されているがその際に一隻の潜水艦らしき物（U-585だったとも言われている）に爆雷攻撃を行って撃破している。

つまりこの船団の護衛がソ連北方艦隊の任務である。ムルマンスクやアルハンゲリ스크は英米からの船団によって運ばれる支援物資の最大の陸揚げ港となっており、戦車や戦闘機からトラック、機関車、はてはタイヤ、防寒着までおよそソ連の必要としている物のほとんどがこの港から供給されているのであった。

しかし『グレミヤーシチイ』の奮戦にも関わらず??当然と言えば当然だが??船団の被害は多く、陸上でも戦線は膠着気味とは言えドイツ軍はまだまだ優勢を保っていた。

第二話：極夜は去りゆき（後書き）

?? 解説??

グレミヤーシチイ

艦級：7号計画型駆逐艦？／？グネフヌイ級駆逐艦

排水量：1,885 t

全長：112.8 m

全幅：10.2 m

速力：38.6 ノット

武装

B - 13 ? 130 mm 砲 ? x ? 4

M 1938 ? 76 mm 高射砲 ? x ? 2

21 - K ? 45 mm 高射砲 ? x ? 2

D Sh K 38 ? 12.7 mm 重機関銃 ? x ? 2

533 mm 3 連装魚雷発射管 ? x ? 2

爆雷投射機 ? x ? 1 ? + ? 爆雷 ? x ? 25、または K B - 3 型

機雷 ? x ? 60、1926 年式機雷 ? x ? 65、1912 年式機雷

? x ? 95 のどれか

航続距離：19 ノットで 2,500 海里

* 解説

1936 年 7 月 23 日、レニングラードの A・A・ジダーノフ記念第 190 号工廠にて進水。第二次世界大戦中に参加したソ連艦の中でも殊勲艦と称される軍艦の一隻。この頃には既に優先対象となりイギリス製の 291 型対空レーダーを装備していたらしい。

目立った戦果としては 42 年 3 月 30 日に独軍 V E I C 型潜水艦の U - 585 を撃沈したとの説もある。

この 7 号計画型駆逐艦は第二次五カ年計画の下で海軍の再建を目的に計画された艦隊駆逐艦でイタリアの支援を受けて建造された。36 隻が建造される予定だったが、航洋性能の低さや構造的欠陥な

どから30隻に留まり、改良型の7U号計画型駆逐艦が開発された。ただし7U号計画型はロシア帝国海軍時代からの伝統に違わず、例のごとく改良の方向を間違えたため改悪型と称される。

航洋性能が低いにも関わらず荒れる北海を活動の場としたため、苦労は絶えなかった模様。

ちなみに太平洋艦隊に所属していた姉妹艦のうち4隻は鞍山級駆逐艦として中華人民共和国に供与され80年代末まで就役、現在は全艦が記念艦として余生を送っている。もしかすると丹陽として中華民国で活躍していた雪風とも交戦したかもしれない。

* 艦魂

相当あっさりした性格の持ち主。冷静沈着な態度も相まって「冷たい奴」とも思われがち。しかもヘビースモーカーで、さらに黒い眼帯まで装備したせいで姉妹達にさえ怖がられている。任務中はPD-38短機関銃を抱えているがその時周りにはウリリフしか寄り付かない。

ただし実は寂しがり屋。しかし戦争中なので余計な私情は任務の邪魔と考えて我慢している。そのせいで船団の艦魂達には「ムルマンスクの氷女」という二つ名を奉られている。

好物はボルシチ、コトレータ（カツレツ）。ただしコトレータは一度しか食べたことが無い。この頃は見ること無いので泣きたいらしい。ちなみに姉妹達はイギリスやアメリカの艦魂達と仲良くして美味しい物にありついていたりとか。

愛称はグリーチャ。

セルブ・イ・モロト

* 解説

もとはロシア帝国義勇艦隊の運送船『モスクワ』。1898年8月にイギリス、クライドバンクのジョン・ブラウン社で進水。

日露戦争では旅順の太平洋艦隊に仮装巡洋艦『アンガラ』として所属していたが活躍の場が無かったため早々に武装解除して病院船となった。が、赤十字社が日本への通告を忘れていたため港内砲撃の対象となり擱坐。

このあたりのアンガラについてはレンガート少尉やまたは一時的にアンガラの艦長をつとめたセミョーノフ中佐の著書に詳しい。

戦後に引き揚げられ通報艦『姉川』として大日本帝国海軍に所属したが、ロシアからの抗議などによりウラジオストクで返還。その後は不明だが、ロシア革命に対する干渉で出兵した際に機関の損傷で行動不能となっていた本艦がウラジオで確認されている。

後に『セルプ・イ・モロト（鎌と槌）』に改名され工作艦に改修された。

独ソ戦勃発の後に占領寸前のレーヴェリから脱出しようとしたが撃沈されてその波瀾万丈な生涯を終えた。

ミハイル・ロマノヴィチ・ウリリフ

大ノヴゴロドで1917年12月28日に誕生。つまり生まれつきのソ連人。

身長は170cm近くで、がっしりした男だが、生まれつき気が小さい。粛清の恐怖でさらに気が小さくなった。独ソ戦勃発により辛うじて切り抜けることが出来たが、それでもビクビクしている。

さらに災難なことにグレミヤーシチイの過激な発言のせいでもおびえて暮らしている。母は大ノヴゴロドがドイツ軍に占領されて行方不明、陸軍大尉だった兄は大テロルの時期に「蒸発」と家族関係も災難続き。

あんまりぱつとしない紹介だが航海士としては優秀。

グレミヤーシチイとウリリフは仲が良いがグレミヤーシチイによると「私が付いていないとウリリフは寂しそうだ。決して私が寂しいからでは無い」とのこと。これは良いツンデ、うわなにをする

やめr

??後書き??

日露戦争に従軍したグロジャールシチイ級航洋砲艦グレミヤールシチイの資料を注文したつもりでうっかり7号計画型駆逐艦グレミヤールシチイの資料を買っちゃったw

と言うわけでこの作品は始まりました。『バルチック艦隊』の方は資料が引越し段ボールの中なので誠に勝手ながら4月初め頃までお休みです。申し訳ございません。

第三話：明るい空、黒い影（前書き）

題名がリバチー岬からリバチー半島に変わっておりますが、私がコ
ラ半島北端を「リバチー半島」を「リバチー岬」だと勘違いしてい
ただけです。申し訳ありません。

第三話：明るい空、黒い影

次の日の夜。寒気が戻って来たが空模様はと言うとこの時期には珍しく晴れていた。北極圏の四月は夜も薄明るく、雲一つないのに星の光は遠慮がちに薄れている。

久しぶりにソ連海軍の四艦隊の一、北方艦隊の主要全艦艇がムルマンスクに勢揃いしているのだが、それでもUボートの目に錯角を与えるための幾何学模様の迷彩が施された七号計画型駆逐艦五隻に六百トン級のウーラガン級警備艇や四百トン級のブリリアント級警備艇、潜水艦が数隻と言った按配なのでどうも迫力に欠ける。本来なら「お客さん」であるはずの、船団護衛任務をひとまず終えて憩っているイギリス海軍の艦艇の方が港の主であるはずの北方艦隊より存在感を示していた。

実際のところはロシア帝国時代も含めれば四艦隊の内でも最も古いのがこの北方艦隊であるが、なにせ帝国が黒海及びバルト海に進出するに至ってこの艦隊は一度消滅している上、アルハンゲリスクに替わって主要な母港となったムルマンスク自体が帝政末期に調査が開始された新しい都市である。未開の地に軍港都市を建設したわけで、三十年やそこらでインフラが整うわけもなく大規模な艦隊をここに配備することも出来ず今に至っていた。

ムルマンスクの街並みもあちこちの建物に焼け焦げが目立ち、瓦礫と化しているのも少なくは無い。人通りも少ないためかその景色は寂寥感を漂わせているが、それ以上に殺伐とした雰囲気振りまいていた。

檣頭には簡素なレーダーアンテナ、艦首に赤い星や共産主義の象徴たる鎌と槌の図案をあしらった旗を掲げるみすばらしい駆逐艦。

グレミヤーシチイ』も棧橋に横付けされていた。幾何学模様の迷彩は保たれているがそこかしこに錆びが浮いている。舷側にはペンキや刷毛を持った男達がしがみついて久しぶりの化粧直しをしていた。実のところはいつ嵐に巻き込まれて海の藻屑になってもおかしくないほど傷んでいるのだがソ連にはそんな修理をする余裕が無いので化粧直しで我慢である。

眼帯を押さえ残された左目を細めながら舷窓から空を見上げてグリーチャは誰ともなく呟いた。舷窓のガラスには気泡やらヒビやらが入っている。

「今日は絶好の爆撃日和だ」

「嫌なこと言うよなあ、グリーチャは」

ウリリフが文句を言っていると彼女は振り返った。

この潮の匂いと湿気に満ちた部屋がウリリフの部屋である。歪んだ鉄の床には海水がうつすらとたまっていた。舷窓の位置が低い上に水密が失われているのでちよつとした波でも水がなだれこんでくる。航行中などは大騒ぎであたり一面が海水の奔流に襲われる。

前にいる艦魂ご本人には悪いのだが、酷使されたせいでガタが来ておりいつ海の藻屑になってもおかしくない駆逐艦に乗り、やたらと荒波に揺さぶられ、海中からはUボートに狙われ、頭上からは爆撃機に襲われる艦隊勤務など彼にとつては御免だった。いくら昔風に言う「軍艦家族」と共に戦っているとは言え。最近になって前からいた第二親衛戦闘連隊に加えて、最新鋭の長距離護衛が可能なPe-3重戦闘機を始めとしてLaGG-3やYak-1、P-39といった戦闘機を多数装備した第九五戦闘連隊が北方艦隊に直援として配備されることになり、爆撃機については一安心かと思っただがいざ実物を見ると驚きの肩すかしも良い部隊であるというのも判明していた。その部隊はもとも第二〇三爆撃連隊で、装備している

戦闘機はほんの数機、特に期待のPe-3など一機しか配備されていない。しかも主要な装備は襲撃機シュトルモヴィクのIl-2なのでいつも対地攻撃に駆り出され護衛に来てくれたことなど一度もない。一度などはJu88爆撃機に襲われている最中に無電で呼び出すと「戦闘機の航続距離が足りないのですこまで行けない。Pe-3も整備中だ。幸運を祈る」と言われる始末。そんなわけで頼りになる直援は腕は確かだが装備が航続距離が短いYak-1やP-39なのであまり遠くにはやってきてくれない第二親衛戦闘連隊しかいなかった。ゆえに憂鬱な艦隊勤務が続いている。

ただ肩すかしなのはいつものことで「数百もの機甲部隊や航空隊、世界最大規模の潜水艦隊を保有するソ連軍はいついかなる敵に侵略されても数日のうちに戦場を敵の領土に移すことができる」などとラジオでは宣伝されていたのに、今や首都モスクワが風前の灯なのもそんな逸話の一つであった。

「こう言っておけば、敵が来ても覚悟は出来ているだろう？ それに来なければそれはそれで運が良いということだ」

「……もう少し空気を読んでくれ、頼むから」

人の心も知らずいささかも表情を変えず言つてのけた相方を彼は恨めしそうに睨んだ。彼女はついと視線をそらすと首の切り傷を指でそろそろと撫でた。傷の奥に鮮やかな赤い血が滲んでいる様が生々しい。

「今日の空襲は『トリニダード』が標的になるだろう」

またもや空気を読まず、天気を予測しているかのような何気無い口調で物騒なことを言うので彼は露骨に嫌な顔をした。それに気づかず小難しい表情で顎に手を当てて考え込む彼女だったが、彼女の予想がムルマンスクにいる艦魂達にとっては重要である。ソ連海軍以上の規模であればだいたいどこでもそうだが、駆逐艦の艦魂は水兵かせいぜい下士官である。が、彼女はここでは司令官だった。

彼女の分身たる『グレミヤーシチイ』は単なる駆逐艦だが、戦艦や巡洋艦どころか嚮導駆逐艦さえも配備されていないソ連北方艦隊にあっては姉妹艦の『ソクルシテリヌイ』『グローズヌイ』『グロムキー』『ゴルダイ』と共に現状では最大最強の艦艇として君臨している。その中でも最も活躍し、特に対空レーダーを装備している『グレミヤーシチイ』が旗艦のような扱いを受けているため艦魂達もその艦魂を司令官として扱っていた。ただ、もともと目つきが吊り目がちでおっかない顔つきな上に眼帯をつけたため如何にも戦馴れた司令官の如き風貌になってしまったからという理由もあったのも確かである。そんなこんなで彼女は黒いジャケットや白地に青い横縞の入った水兵の伝統的なシャツを脱ぎ捨て、ソ連海軍の特徴である肩章の無い立襟の上着を着ることとなったのだ。

「……本日は猛烈な空襲が予想されるが、各員がその義務を全うしこれを撃退せんことを期待する。うむ、これは名文句だ」

もうすぐ始まる打合わせを締括る言葉を考え終わり、頬を少し緩めて一人悦に入る彼女にウリリフはツツコんだ。

「それってネルソン提督のパクリだろ」

「くっ……」

ネタ元を見破られて（有名な文句の改変なので見破るも何も無いのだが）珍しく動揺した様子を見せる彼女の肩をぼんぼんと叩くと彼は仕事をしに、すたすたと艦橋へ行った。

彼女はというと彼が去って行った廊下をじっと見てからウシヤン力をぐいと被ると光を放って転移した。

ウリリフが廊下の角を曲がるとぺたぺたと壁に貼られたプロパガンダポスターが彼の目に入った。バンダナを頭に巻いた鋭い目つきの女性が人差し指を口に当てて一言、「おしゃべりするな！」というのもある。

まったくその通りだ、おしゃべりしたら矯正収容所への片道切符を渡されちまう。

そんなことを考えながら歩いていると艦橋についた。あちこちにヒビが目立つ。艦長のアントン・ヨシフォヴィチ・グリーン中佐も心配そうに天井のヒビを撫でていた。聳え立つような大男であるグリーン中佐は「こいつもかわいそうなヤツだ」とボヤくとウリリフに向き直った。

「おお、ミーシャ。今日は出撃の予定は無いぞ」

「は、それは分かっております」

かしこまって答えた彼をグリーン中佐は笑い飛ばした。

「はっは、犬はいないからゆっくり休んでおけ」

「犬？」

不審そうに尋ねた彼にグリーン中佐はさも当然と言うように吐き捨てた。

「戦っている俺らの一挙一同を何もせずに見張ってる犬さ」

艦橋にいた十五人ほどの幹部達がどっと笑った。

ウリリフの不幸なところはここである。同居人（人では無いし常人に感知できない存在だとは言え）が反政府的言動を連発する、艦長に気にいられているのは良いがこの人も危険なことをよく口走る。「ヤツらがまともな共産主義者なわけがないぞ。俺の方がヤツらよかよっぱど共産主義のことを勉強しているぞ」

僅かな救いと言えば彼は紛うこと無き共産主義者であるところだった。ただそれだけと言えばそれだけで、あまり救いにはならないが。

「艦長、うちのミーシャをいじめてください。こいつあ人一倍気が弱いんですよ、なあ？」

航海長イワン・ヴィクトロヴィチ・ワシリエフ大尉が安タバコを啜えた口に苦笑いを浮かべて海図から顔を上げた。彼がウリリフの上司である。何となく往年の白軍もかくやといった雰囲気になった

艦橋に折しも主計長が昼食のシチーを持ち込んだ。帝国時代からの慣例、艦長による味見の時間である。

グリーン中佐はシチーを嚼ると顔をしかめた。

「ワロージャ、もうちょつと塩を効かせて、あとベーコンとか具も入れてやれ。こんなもんじゃ俺がゴリコフ大佐（戦艦ポチョムキン）の艦長だったのが有名な反乱の際に殺された）になっちまう」

「しかしですね、食料品もほとんど無いんですよ」

「ならワロージャ、犬の食いものの質を落としてやれ。ヤツがベーコンたつぷりのシチーを食っているのは俺だって知っているんだぞ」「む、無理ですよ艦長。そんなことしたら私が懲罰大隊送りになつてしまいます！」

慌てふためいている主計長にグリーン中佐は仕方ないという表情をした。

軽巡『トリニダード』の倉庫にその艦魂はいた。やつれた様子で安楽椅子に揺られている。グリーンチャはと言うと壁に背中からもたれかかり煙草をふかしていた。

「トリニダード中尉殿、今日の天候から見るとドイツ軍の爆撃が行われる確率は非常に高いものと考えられる。よってその用意はしておくようお願いする」

短くなつた煙草を左手に持った灰皿に押し付けながらグリーンチャは、自分はどうもつつけんどんな物言いになつてしまふなと考えていた。一方のトリニダードは怯えたような表情を見せていたが、ドイツ軍による爆撃の可能性かそれとも前にいる「ムルマンスクの氷女」の風貌に怯えていたのか、どちらなのかは分からない。あるいは両方だったのか。

「あ、あのー、グレミヤーシチイ大佐」

「グリーンチャで良い。本来なら貴官の方が階級は上だ」

「じゃあグ、グリーチャさん」

この後しばし逡巡してから意を決したように咳払いをした。

「実際の共産主義ってどうなんですか？」

予想だにしていなかった問いかけにグリーチャはたじろいだ。左目の視線が宙を泳ぐ。

「……な、何故そんなことを？」

ようやく左目で見据えるが、相手の澄んだ青い瞳に見つめ返されて視線を外す。

ソ連の体制は話に聞くロシア帝国の社会体制を首だけ挿げ替えて社会主義と言う名前に変えただけのものと感じられるのだが、どうも余所では「共産党が指導する貧富の差が無い理想社会」として伝えられているらしい。

そういう感覚を一度ならず覚えていた彼女はとりあえず相手の話に合わせておこうと決心していた。

別に相手に実害は無いし、なによりも夢を壊さずにすむ。それに「敵たるナチスとあまり変わらない全体主義国家を支援しに行く」よりは「残酷なナチスにやられて崩壊寸前の理想国家を支援しに行く」方がトリニダードのような援ソ船団の護衛達には嬉しいであろう。実質は前者であっても、後者だと思えば入ればやりがいがある仕事だということに変わりはない。

フィンランドがナチスと共闘したのも幸運で、実際はソ連が悪くても連合国の中ではフィンランドに対する同情心が薄れていた。一方のソ連は自らの悪行が帳消しになり、逆に「ドイツとフィンランドに悲惨な目に遭わされているかわいそうな国」扱いである。

グリーチャの姉である「ヴォルコヴォイ」ことゴルダイは「憐れんでやれ、リユティ（フィンランドの大統領）はカレリアを『心の故郷』認定して墓穴を掘りよった」と言ったがグリーチャもそれには全面的に同意であった。

「もちろん悪い事をすれば逮捕されるし、トウハチエフスキーやヤキール達は悪い連中だったから逮捕されて死刑になったわけだ」

悪い事をしてなくてもな、と言いたかったが余所者に言うわけにはいかない。いくら不満があるとは言え彼女とてロシア生まれであり、生まれた地の恥となるような事を漏らすわけにはいかなかった。

だが、妙に疑り深い視線を向けてくる相手に彼女は窮した。

「無能な貴族様が士官をやって日本にボロ負けした頃に比べればずっと良いって生き残りは言うんだ」

彼女の生まれ故郷であるレニングラードには日露戦争に参加して「ツシマの惨劇」を生き残り、ついには革命の元勳となった防護巡洋艦『アヴローラ』の艦魂が「嘆きの女神」とのあだ名で呼ばれていた。帝国時代からの生き残りである三隻の戦艦の艦魂がヤケ酒の飲みすぎでアル中になっていたり、彼女の言葉が嘘であることの証拠なら沢山あった。しかしそんなことを言うわけにもいかず苦い笑みを浮かべながらソ連の素晴らしさを力説する。

それでもやはり疑いを解く事は出来ず、逆にスペイン内戦のルポで後にスターリニズム批判の嚆矢になったオーウエルの『カタロニア讃歌』などを持ち出して来た相手に苦戦し、最後は「いずれ歴史がソビエトを判断するだろう」と苦し紛れの結論で質問を強制終了する羽目となった。

だが彼女にも聞きたい事は多い。成り行きで指揮官にされたとは言え相応の責任は伴うので情勢判断の材料は多い方が良い。そのことに関する質問だがそれこそがこの会見の本題であり、トリニダードもすぐに答えてくれた。

「地中海ではマルタ島を巡って我々とイタリア海軍が交戦中なのは御存じでしょうが、どうもドイツ空軍の援護が強力らしく戦況は芳しくありません。その上、太平洋では日本がなぜか無敵の快進撃を続けておりまして……それにしても昔は一大海上帝国を築いたオランダが本国どころか植民地まで消滅したりと歴史は残酷です。クラ

ウツ（ドイツ人）も相変わらず懲りてないし、イタリア人も調子に乗るのでろくなことはありません」

「ぼやき節を始めた相手にグリーチャは相槌を打った。

「その通り。歴史なんてロクなもんじゃない。それで他には」

「あつ、あ、すいませんつ。そ、そしてここ、北海方面ですが良くないニュースです。巡洋戦艦『シャルンホルスト』および重巡洋艦『アドミラル・ヒッパー』『プリンツ・オイゲン』、ポケット戦艦『リュッツオウ』『アドミラル・シェーア』がノルウェー方面に進出したことが確認されました。前に進出した『ティルピッツ』もあわせればドイツ海軍の水上戦闘部隊の総力と言っても良いでしょう。慰めとしてはアドミラル・ヒッパー級重巡洋艦のうち一隻が我が方の潜水艦の雷撃で損傷していることですが」

「……だが、ヒッパー級が一隻本国に戻っても『グナイゼナウ』が修理完了次第こちらに来るのでは？」

「……そう言うことですね」

眉をひそめながらグリーチャはライターをカチカチと言わせて煙草に火をつけた。トリニダードもサイドテーブルに置いてあった水で喉を湿らせた。

二人は押し黙ったまま考え事をしていた。

グリーチャは一本吸い終わると、灰皿にぐりぐりと押し付けた。

「そう言えば、イタリアにも駆逐艦はいるだろうが、どんな感じだ？」

「……イタリアの駆逐艦、ですか？ あー、地中海艦隊からの報告では『足だけは速いので手こずるがそれ以外はどうか』ということも無い。航洋性が低いらしくちょっとした嵐でも沈むようだ」とのことでしたが、それがどうかなさいましたか？」

不審そうに尋ねるトリニダードに彼女は乾いた笑い声を上げた。穏やかな地中海におけるちょっとした嵐で沈む駆逐艦の親戚のようなものである自分がこんな常時大嵐の荒海を職場にしていると分かれば笑うしか他は無い。

わりあい呑気な早朝が過ぎていくがルフトヴァッフェ（ドイツ空軍）が損傷して動けないイギリスの軽巡洋艦という大物を見逃してくれるわけもなかった。

第三話：明るい空、黒い影（後書き）

あとがき

ちよつとした悩みですが、地の文で人名を表記した時、どうしたら分かり良いですか？

例えばウリリフと書くか、ミーシャと書くか。グレミヤーシチイと書くかグリーチャと書くか。

私からすると会話文での呼び名と地の文での表記を一致させた方が良いかとも考えているのですが……。

ご意見お待ちしております。

解説

矯正収容所

ラーゲリとして知られる。罪人を「矯正」するのが建前なので「矯正収容所」なのだが実態が実態なので一般的には「強制収容所」と訳される。ただしラーゲリには本来「キャンプ」ぐらいの意味しかない。もちろん政治犯から刑事犯まであらゆる罪人や捕虜までをぶち込んで強制労働させる施設なのだが。

実態は実際にぶち込まれていたことのあるソルジェニーツインの著作に詳しい。しかし場所によつてはこの内部の方が言論の自由があったとも言われる。スターリン批判も自由だったり子作りできたりと結構フリーダムなところもあった。

有名どころでは極寒のシベリアで金山掘りをさせられるために余命が三週間にまで縮むコルイマ収容所など。

懲罰大隊

軍法を犯した者でも軽度な者はラーゲリではなくここに送られる。ここで戦いながら刑期を過ごす^{タンクデサント}が、戦車跨乗兵にされたり、シュトルムヴィクで後部機銃手（その席のみ都合により無装甲）を勤めさ

せられたり、主力部隊に先んじて地雷原を歩かせられたりと過酷な
のでほとんどが生きてお勤めを終えることはない。ちなみに大佐で
も容赦なくタンクデサントをさせられたりする。

ケチなことをして懲罰大隊送りになるよりラーゲリ送りの方が良
い場合もある。ただ、コルイマに送られることを考えるとお勧めで
きない。真つ当にソ連軍で上官の言うことを素直に聞いて祖国防衛
の為に働こう！ さあ、ファシストのIV号戦車に小銃で突撃する
作業に戻るんだ！

トウハチエフスキー

ミハイル・ニコラエヴィチ・トウハチエフスキー。

もとはロシア帝国軍の将校だったソ連軍元帥。没落貴族の生まれ。
赤軍の司令官として活躍し、縦深戦術の考案、空挺軍の設立、ロケ
ット開発、機甲部隊の整備などに功績を残す。諸外国から「赤いナ
ポレオン」「赤軍の至宝」との異名を与えられたが粛清された。
ちなみに作曲家のショスタコーヴィチとは親友で、フランス大統
領となったド・ゴールとは捕虜収容所仲間。

彼が殺された一方、ブジョンヌイのような老害が生き残ったりす
るから困る。

ヤキール

イオナ・エマヌイロヴィチ・ヤキール。

ソ連軍元帥。トウハチエフスキーの仲間として活動していたが肅
清された。Wiki見りや分かるように物凄くかわいそうな人。

ただそこまで有能では無かったらしい。

トリニダード

艦級：クラウン・コロニー級軽巡洋艦？フィジー・グループ

排水量：8,520 t

全長：169.3 m

全幅：18・9 m

速力：33ノット

武装

Mark? X X I I I? 15・2 cm? 3連装砲? x? 4

Mark s? X V I? 10・2 cm連装高角砲? x? 4

ポンポン砲? x? 4

エリコン F F? 20 mm連装機関砲? x? 6

12・7 mm? 4連装機銃? x? 4

533 mm 3連装魚雷発射管? x? 2

装甲

舷側：? 83 mm

甲板：? 51 mm

航続距離：15ノットで7,400海里

艦載機：スーパーマリン? ウォーラス水上偵察機? x? 2

*解説

1941年3月21日、デヴォンポート造船所にて進水。イギリス本国艦隊の所属でソ連向け船団の護衛に従事した。

艦級としては第二次ロンドン海軍軍縮条約の範囲内で建造されている、平凡な軽巡洋艦。

*艦魂

実は共産主義者だが、偶然オーウェルの書いたスペイン内戦のルポタージュである『カタロニア讃歌』を手に入れたためソ連に少し疑念を抱いている。

P e - 3

乗員：2名

全長：12・6 m

翼幅：17・1 m

発動機：クリモフ M - 105 R A? x? 2

出力：1,110 hp

空虚重量：5,858 kg
最大速度：530 km/h
航続距離：1,500 km

武装

ShVAK? 20 mm 機関砲? x? 1

UB? 12.7 mm 機銃? x? 3

ShKAS? 7.62 mm 機銃? x? 1

爆弾 700 kg まで

ペトリヤコフ技師の開発した双発重戦闘機。

もとは「ソ連版モスキート」とも呼ばれる急降下爆撃機Pe-2。だがそのもとをたどれば高度10,000mで630 km/hと言う記録を出した試作高々度戦闘機VI-100なので、ある意味では先祖帰りした機体。ただ、与圧キャビンと過給器が信頼性に欠けた上に、仮想敵国の日独に高々度爆撃機が存在しないため不要とされたそれらの装備は外されている。「ソ連版モスキート」から発展した機体とは言え主翼などは金属製。このシリーズは生産性が悪かったため需要の多かったPe-2が重点的に生産され、Pe-3は少量生産に留まった。

優れた性能を誇ったがPe-2ゆずりの操縦の難しさからそこまで好評ではなかった模様。当のペトリヤコフ技師もPe-2に乗っていて事故死した。

スペックはPe-3 bis。

Yak-1

乗員：1名

全長：8.48 m

翼幅：10.00 m

発動機：クリモフM-105PF

出力：1,180 hp

空虚重量：2,394 kg

最大速度：592 km/h

航続距離：700 km

武装

ShVAK? 20 mm 機関砲? x? 1

UB? 12.7 mm 機銃? x? 1

ヤコブレフ技師の開発した単発戦闘機。朝鮮戦争初期まではソ連の戦闘機と言えば「ヤク戦闘機」と言うのが西側の共通認識だったがその基盤となった戦闘機。のちに改良を重ねられYak-9やYak-3と言った名機を生み出した。

機体構造は鋼管羽布張りや合板製部分もあったりと旧式。ただしウクライナなどの重工業の中心地を押さえられたソ連では金属が不足していたのであってこの構造を取らねばならなかったし、副次的ながら家具工場でも機体が製造できるという利点があった。にも関わらず液冷エンジンを搭載したおかげで見るからにスマートな最新鋭戦闘機と言った風貌となっている。あだ名も「美男子」。

使用された合板の「デルタ合板」は耐火性、防弾性に優れていたが非常に重かったため小型にも関わらずかなり重たい機体だが、優れた空力的設計と大馬力エンジンのおかげで高速かつ武装も当時としては強力。ただ航続距離が短いので護衛任務には向かない。それでも迎撃戦には大活躍で有名どころでは「スターリングラードの白百合」ことリディア・リトヴァクなどエースを多数輩出した。

ただ、このころのソ連機には共通だが工場の疎開（二週間でウクライナからウラル山脈の東にまで疎開した工場もあるほど急激であった）などの影響で品質が一定せず、カタログスペックに達するとは珍しい。

スペックはYak-1B。

LaGG-3

乗員：1名

全長：8.90m

翼幅：9.80m

発動機：クリモフM-105PF

出力：1,180hp

空虚重量：約2,300kg

最大速度：560km/h

航続距離：650km

武装

ShVAK?20mm機関砲?x?1

UB?12.7mm機銃?x?2

RS-82ロケット弾?x?6?または爆弾300kgまで

ラボーチキン技師、ゴルブノフ技師、グドコフ技師の三人が設計した単発戦闘機。

やはり機体構造のほとんどがデルタ合板。わりあい頑丈で被弾にも強いが一旦壊れるとたちまち空中分解する。しかもエンジンが機体の性能に比するとアンダーパワーなせいで全体的に性能が低い。そこで対地攻撃が主任務とされたが、さらにはエンジン自体が品質の問題で性能がまちまちなためひどい物になると飛ぶのもやっとなという有様。1型から66型まで、66の派生型が存在しており終戦まで配備されていた。

それにしてもあんまりなのでパイロットからは「塗装された完璧な棺桶（ロシア語で表記して頭文字をとるとLaGGとなる）」の蔑称を頂いてしまった。

同世代の主力戦闘機の中でも最低性能の本機だが後に空冷エンジンに換装など大幅な改設計が行われ名機La-5に生まれ変わる。

スペックはLaGG-3?35型。

P-39エアラコブラ

乗員：1名

全長：9.19 m

翼幅：10.36 m

発動機：アリソンV1710-67

出力：1,200 hp

空虚重量：約2,300 kg

最大速度：621 km/h

航続距離：1,040 km

武装

T4? 37 mm 機関砲? x? 1

12.7 mm 機銃? x? 2

RS - 82 ロケット弾? x? 6? または爆弾300 kgまで

米ベル・エアクラフト社開発の単発戦闘機。運動性を良くする為にエンジンを胴体の重心付近に収容、プロペラシャフト内部にあらゆる航空機を葬る極めて強力な37 mm 機関砲を装備、無敵の戦闘機になる予定だったが液冷のアリソンエンジンがボロすぎて一番多い中高度での空中戦で日独の戦闘機にフルボッコ、米英では極めて不評だった。

しかしレンドリースでこれを手に入れたソ連においては本機が得意とする低高度での空中戦が多発した為大活躍。対地攻撃にも活躍しドイツ軍陣地に自慢の37 mm 機関砲弾を雨霰と降り注がせた。ちなみに報われない後継機P - 63 キングコブラもいるが、やっぱりソ連では大人気。

スペックはP - 39 M。

II - 2

乗員：2名

全長：11.60 m

翼幅：14.60 m

発動機：ミクーリンAM-38F

出力：1,720hp

空虚重量：4,360kg

最大速度：414km/h

航続距離：720km

武装

VYa-23?23mm機関砲?x?1

UB?12.7mm機銃?x?1

ShKAS?7.62mm機銃?x?2

RS-82?x?6口ケット弾?またはRS-132x?4口

ケット弾?または爆弾600kgまで

イリコシン技師が開発した単発の襲撃機。シュトルモヴィク重武装を誇り地上攻

撃に活躍した。装甲も頑丈でなかなか撃墜できず(それでも鈍重な本機の損害は大きかったが)ドイツ空軍には「空飛ぶベトンブ力ー」と厄介がられ、ドイツ陸軍には「黒死病」「黒い死神」と恐れられた。ただし後部機銃席のみ重量の問題で装甲が無きに等しいため、機体は無傷でも機銃手が蜂の巣になっているなど日常茶飯事。そのためその席はタンクデサントとともに懲罰大隊の主要な送り先の一つに。

一応対空戦闘が出来ないこともないが、運動性が悪いのでやらな
いほうが賢明。もともとそんな用途に使う物でも無いし。ただし戦
闘機型が試作されたこともある。

スターリン曰く「赤軍はパンや空気と同じく本機を必要としてい
る」。なんだかんだ言っ
て彼の方が超兵器マニアの伍長よりは現実
が見えていたw

スターリンの猛烈な後押しのおかげで総生産数は軍用機で史上最
大の36,163機を記録した。派生型も多い。

スペックはIL-2M3。

J u 8 8

乗員：4名

全長：14・40m

翼幅：20・00m

発動機：ユンカース？ユモ211J-1 x 2

出力：1,350hp

空虚重量：不明

最大速度：510km/h

航続距離：2,430km

武装

M G 81? 7・92mm機銃? x? 5

爆弾3,000kgまで

ユンカース社が開発した独軍の高速双発爆撃機。水平爆撃、緩降下爆撃、雷撃となんでもこなせる名機。性能的にもそこそこだが「高速爆撃機」の常で速度も作戦高度も満足できる物ではなかった。夜間戦闘機に改造されたりとドイツ機には常だが派生型が異常に多い。

スペックはJ u 8 8 A - 4

第四話：不吉な鴉の羽音が（前書き）

前話でムルマンスクの防空を担っているのは貧弱な第九五戦闘連隊しかいないと書いてしまいましたが、よく考えるとエースパイロット集団の親衛第二戦闘連隊がおりました。

誤った内容を書いてしまい誠に申し訳ないです。

第四話：不吉な鴉の羽音が

四月三日。

ムルマンスクに日の光が差す。崩れ去った家々、穴だらけの道路、真つ二つに引きちぎられた自動車の残骸。高射砲の黒光りする砲身が瓦礫の中から空を覗き、半分崩れかけた建物の屋上には高射機関砲が据え付けられている。

掻き分けられた瓦礫の間を道が通り、ペーペーシャことPPSh-41短機関銃を背負った歩兵の一团を満載したゴリキー自動車工場製のトラックGAZ-MMの隊列やら高級将校を乗せたフォード製のジープやらが走っていた。

焼け残っている酒場ではソ連人はもちろん、イギリス人やアメリカ人も酒を飲んでいた。喚き声やコップや食器の触れ合う音が煉瓦の壁に反射し、酒場を覆う。

国民の士気を鼓舞するためこの独ソ戦は『大祖国戦争』と名付けられ、またソ連指導部は民族意識を「唾棄すべきもの」と位置づけたこれまでの政策を放棄し、帝政時代に作詞された軍歌なども解禁された。海軍でも帝政時代の終わりとともに絶えていた「親衛称号」を復活させた。景気の良い話を多く作り上げて士気を高めようとしたソ連海軍首脳部はささいな武勲にもその称号を与えたため、しいにはかつての優雅な面影を完全に失っていた、元はニコライ二世一家が大の鼻屑にしていた帝室ヨット『スタンダー』である敷設艦『マルティ』にまで親衛称号が授与されることになった。四三年には今までのソ連式の制服がロシア帝国軍が採用していたものに類似したギムナスチオルカ風のものへと変わることとなる。

ムルマンスクにいる海軍将兵の間でちょっとした人気になっている歌が『ヴァリヤーグ』であった。日露戦争で勝ち目のない戦いに

赴き、英雄的な最期を遂げたとされる防護巡洋艦を讃えたこの歌は自分たちの境遇とも重なるのか。さらに言えば防護巡洋艦『ヴァリヤーグ』は辺鄙な造成中の港町だった頃のムルマンスクに配備されていたこともあり、それが彼らに親しみを持たせた。

ただ、この歌は三番が抜けていた。「黄色い顔の鬼畜どもが待ち受ける」などと歌った三番は日露戦争後に結ばれた日本とロシアの同盟に悪影響を及ぼさないようにとロシア帝国が削除してしまったので、誰も覚えていなかったのだ。歌っている方にしても「黄色い顔の鬼畜ども」と戦っているわけではないのでおかたの意見は「三番がなくてもどうでもいいや」とのことであつた。

ちなみにこの歌はドイツ人が作詞した歌である。敵国人の作つた歌だが政治将校達にしても指揮を鼓舞するのにちょうど良い歌なのでうるさいことは言わない。

したたか酔っぱらつた士官が歌い始めると周りからも同調者が現れ、最後には大合唱となつてしまった。酒場の隅で鋭い視線を外国人たちに投げ掛けていた政治将校達も大声で歌い始める。

？

！

？

同志達よ上甲板へ、総員戦闘配置につけ！

最後の観艦式は始まり

我らの誇り高き『ヴァリヤーグ』は敵に降伏などせぬ
誰も慈悲など求めはせぬ

！

全ての軍艦旗は翻り、鎖は音を立て
錨は巻き上げられり
備砲は配置につき
明るき陽光で不吉に光る

？

？

風切り音と爆音に包まれ
砲声は轟き弾丸は叫ぶ
恐れを知らぬ誇り高き『ヴァリヤーク』は
もはや地獄と化していた

死の苦しみに船体は震え
轟く砲声、悲鳴と呻き声
艦は炎に包まれて
別れの時はそこに来たれり

！

！

！

さらば同志達よ！ 幸運を、万歳！
眼下の海は沸き立てり
考えだにせず、昨日共^{こそ}にいた朋友^{みなも}が
水面の下で死ぬるとは

？

？！

語るべき石や十字架も無く

誇り高きロシアの旗のため

ただ海の波だけが永遠に讃える

『ヴァリヤーグ』の英雄的な最期を！

歌い終わると外国人の塊からも拍手がわいた。何人かの酔っぱらった士官らしき人物達が立ち上がり、ウォッカの入ったグラスを片手によるめきながら近づく。

「はらしょー！ おーちん、はらしょー！」

たどたどしいロシア語の叫びをあげると「盟邦ソ連の勝利を祈って乾杯！ 一杯奢らせてください」と口々に言い、ソ連の士官達に酒を奢り始めた。しかし、突然不吉なサイレンが鳴り響いた。

「ファシストどもめ！」

酔っぱらった士官が喚くや、ソ連兵達は蜘蛛の子を散らしたように戸口に殺到し外へと駆けていった。

ムルマンスク港に停泊する艦隊にも報告が伝わっていた。

「監視所からの報告です！ 敵はJ u 8 8およびB f 1 0 9、B f 1 1 0、その数計約四十！」

無電室からの報告に駆逐艦『グレミヤーシチイ』の艦長グリーン中佐は舌打ちをした。

「ふん、ファシストめ。性懲りも無く来やがったな。総員戦闘配置につけ」

艦長の下命で艦内の動きが慌ただしくなった。スピーカーが狂ったように喚き立て、甲板では砲弾を山積みにした台車が走り回る。主砲や高射砲が空を睨んでいた。

航海士のウリリフは艦橋にいるがこの駆逐艦が動けないのであ

まりやることがない。そもそも、狭い港の中で回避運動なんかをしたらことである。航海長のワシリエフ大尉は酒場から急いで帰ってきたがへべれけだ。砲術士官達は忙しそうにでかでかと「機密」と書かれた本やら紙やらを引っ張り出していた。よくは分らないがややこしいらしい。

「ソコリヌイ・ウダール（隼の一撃）だ。それを忘れるな。それと敵は戦闘機ではなく爆撃機だぞ。戦闘機なんざ無視しちゃえ！」
第九五戦闘連隊の今日の出撃で指揮を任されていたポリフェモフ中尉の命令に無線機からは酷い雑音混じりの「はい！」という威勢の良い声が聞こえてくる。先頭を飛ぶのは中尉が操るイー-2。乗機が示すように、元が対地攻撃専門のシュトルモヴィク乗りの彼には空戦に関する知識などほとんど無いのだが、万事システムを尊ぶソ連においては素人でもすぐにある程度の戦いをこなせるような戦い方を授けてくれる。

イー-2やP-39、ハリケーンが混ざったむちゃくちゃな編成の編隊はゆるゆると上昇して行き地面を俯瞰する。鈍重なイー-2は遅れがちで喘ぐように上昇した。

見るからにスマートなBf109や獰猛なスタイルのBf110が爆撃編隊を先導する。眼下に半ば灰燼と化したムルマンスクの町並みが広がっている。フィンランドとの国境にほど近いペチェンガから出撃したドイツ空軍の第五戦闘航空団第二飛行隊が爆撃機の護衛に付いていた。

「蚊蜻蛉どもは我らに任せ、貴官らは安心して爆撃に専念してくれ給え」

隊長のギュンター・シュルツ大尉は無線でそう伝えるとスロット

ルを開いて上昇し、単調なプロペラの音を響かせつつ敵を探した。

わらわらとてんでばらばらに第九五戦闘連隊の航空機は爆撃編隊に飛びかかった。爆撃機を護衛していた第五戦闘航空団第二飛行隊の面々は二機一組のロツテ戦法を崩さず突撃する。

たちまち曳光弾の光が飛び交う。数機のI-16やハリケーンがたちまち火達磨となった。

ポリフェモフは獲物を探していた。

「ヒー、一匹やつつけたぞ！」

無線から聞こえるこの雑音の酷い声はフォードル・ミハイロヴィチ・レスネトフ少尉の声だった。彼はウクライナで飛行機からの農薬散布を生業なりわいとして歩んできたが戦争の勃発で戦闘機のパイロットとなつ人物である。彼はいわゆる変人で、旧式と見なされているI-16を巧みに操って戦果を順調に伸ばしていた。上官達は彼の戦果だけを見てもつと良い新型機に乗るよう勧めているのだが、彼の戦法は小回りが利くI-16でないと駄目らしい。

レスネトフ少尉機を見ると次の獲物に飛びかかるべく急降下していた。獲物はBf109。どうやら新参のパイロットらしく頑丈なI1-2に機銃を浴びせるのに夢中で上から襲いかかるI-16に気付かず、ほとんど真つすぐに飛んでいた。

「おいおい、狙うのは爆撃機だぞ……まあいいか」

ポリフェモフは一人こちる。

マクシミリアン・フォン・ローゼンベルクは前を飛ばす『空飛ぶベトンブンカー』に機銃弾をあらかた撃ち込んでしまっていた。

「クソッ！ 何故落ちない！」

I1-2は必死の回避運動もむなしく多数の機銃を撃ち込まれ後部機銃も既に沈黙しているのだが煙さえ出さず、まだ平然と飛んでいる。彼は残弾が僅かなことを理解していた。本当はしたくなかつ

たのだが、コックピットに機銃を撃ち込むことにした。いくら頑丈でもパイロットが死んでしまえば意味は無い。

彼は前のI-16に対して十分に上へ行くと機首を下げた。ふらふらと動く相手の操縦席に機銃の狙いをつけるのは難しい。スロツトルを絞り、ゆっくり腰を据えて狙いをつけようとした。

殺気。彼はギョツとして振り向く。真後ろにI-16がいた。機体のすぐ上を機銃弾がかすめる。叫びつつ急いでスロツトルを開いたが時既に遅し。

「助けて！」

レスネトフ少尉はI-16の足を片方だけ出したまま飛んでいた。よく見ると一方の足はへし折られたのか妙なところでちぎれている。勢いをつけて降下した彼はそのままフォン・ローゼンベルクのBf 109の垂直尾翼に足をうまくぶつけた。いやな音がエンジンの轟音とともに鳴り響き、垂直尾翼と足が同時にへし折れる。

「足のお味はいかが、ネーメツ（ドイツ人の蔑称）め！」

ロシア空軍伝統の技、タラーンは敵機に体当たりするという技であつた。世界で初めて敵機を撃墜したロシア帝国空軍のパイロットもこのタラーンを行って敵機もろとも落ちていったのだ。しかし、意外や意外、手練れが行った場合は生還率も高い。

タラーンで五機以上の敵機を撃墜してエースパイロットになった者もかなりの数があり、自軍の航空機の性能が敵に比して劣っていることを理解していたソ連空軍も始めは推奨していた。後にドイツ軍機と同等の戦闘機が登場したにも関わらず、性懲りも無く体当たりを繰り返して、せっかくの新鋭機を次々に破壊してしまう者が非常に多かつたので結局は禁止されることとなってしまったが。

両足の折れたI-16が去っていった後にはきりもみしながら落ちていくBf 109があつた。そして落下傘が一つ、空中で頼りなげに浮かんでいる。

ポリフェモフ中尉はニヤリとそれを見た。パラシュートにぶら下がっている相手??? 生きている限りソ連の空を侵し、仲間達を苦しめるに違いない??? を撃つてみたくなったがそれを抑え、下を飛ぶスツーカーを確認すると「ソコーリヌイ・ウダール!」と一声叫び操縦桿をぐつと前に押し倒した。

中尉のイー-2はスツーカーに食らいつくべくけたたましい風切り音と共に急降下。二十三ミリ機関砲が火を吹き、火線は機体を傾けて逃げようとしたその胴体にミシン目を空けた。その威力は凄まじく一刀両断されたスツーカーはたちまち堕ちて行く。無線から響いていた雑音混じりの悲鳴はぶつつと途切れた。

「ざまあみる!」

中尉は機体を起こしながら叫ぶ。水平飛行に移ったのを計器で確認してからもろ手を挙げて喜びを表現したが、背後から聞こえた激しい乱射音に気付き操縦桿を握り直した。慌てて旋回するとその機体の真下を猛スピードでBf109が飛んでいった。あつという間の出来事に反応できなかった中尉は何事かと辺りを見回す。後部座席の射撃音は止んでいた。が、下をすり抜けざまにエンジン下部にあるオイルクーラーを撃ち抜かれていたらしい。たちまちプロペラの回転は弱まり、黒い煙が前方を覆う。

中尉は煙の切れ目から眼下に広がる草原を見つけると不時着を試みた。どんどん濃くなっていく煙、そして燃料に火がついたらしく足下が熱くなってきた。煙の切れ目から一瞬だけ地面が見え、その記憶を頼りに降下する。

頭に強い衝撃。彼は意識を手放してしまった。

既にこの第五戦闘航空団でも有数のエクスパルテンであるハインリヒ・エールラーは怒り心頭だった。彼は僚機を失ったローゼンベルクの機体をちらりと目にはしていたが自分の獲物を追うのに夢中でつい見過ごしてしまったのである。

「グスタフ、ついてこい！」

彼が狙うは前方で両足の折れたI-16。片足がぶらぶらとワイヤー一本でぶら下がっていた。彼はスロットルを全開にしてI-16に追いつく。相手の腕は良いらしくさっきのI-12のように容易に後ろを取らせてはくれない。それに如何に旧式とは言えI-16は小回りの利く危険な相手であった。彼は一度、一本の木立の上でくるりと一回旋回したのを見たことがある。水平運動をやらせればまるで曲芸飛行としか言い様が無い動きを出来るのがI-16と言う敵だった。

上下運動で優位に立つ二機のBf109にI-16は翻弄されていたが、それでもエールラーが射線に捉えたかと思うと瞬時に機体を横滑りさせて逃れる。グスタフ・レルヒの乗る僚機が後ろにつくがスロットルを絞ったのか急減速し、レルヒの後ろにつく。レルヒはなかなか機銃を撃たせない。が、何度も繰り返していると要領がハッキリと掴めた。わざと水平旋回を挑むとI-16は見事後ろに食らいついた。その早業に彼は頭の片隅で舌を巻いた。相手に考えさせる暇を与えず彼はスロットルを全開にして急上昇。焦ったI-16は追おうとして機首を上げた。グスタフの機体が機銃を放つ。I-16の主翼がもげ、機体は落ちていった。白い落下傘が開く。

第九五戦闘連隊が戦闘機に手間取っているうちにドイツの爆撃機編隊は僅かな損害だけでどうにか切り抜け、少数の護衛を引き連れてムルマンスクへと一直線に向かっていく。が、その行く手から新車の機影がやってきた。

P-39に乗るアンドレイ・イワノヴィチ・ボルコフ曹長はBf109と旋回戦を演じていた。
「離れる！ こっち来んな！」

喚けど叫べど二機のBf109は入れ替わり立ち替わり攻撃を仕

掛けてくる。一機を追うとその僚機が横から攻撃を仕掛けてくる。

軽い音がして風防に穴が空いた。冷たい風が操縦席に吹き込む。手がかじかみ始める。彼は目をかっと見開き、懸命にこらえつつ旋回を続けた。後ろに敵がつく。スロットルを開き急上昇、次いで急降下。胃液が口から漏れる。

突然無線が声を発した。

「私は親衛第二戦闘連隊司令官、ボリス・サフォーノフだ。遅れて申し訳ない。今から攻撃に入る。ようし、者共、行け！」

第四話：不吉な鴉の羽音が（後書き）

ソ連のエースパイロット

一般的に数頼みの雑魚集団とのイメージが強いソ連空軍ですが結構個性的なパイロットが多いのが特徴です。たとえば個人戦果62、協同戦果0のある意味驚異的な記録を持つ「連合軍最強のエース」コジエドウーブや1941年の空を旧式きわまるI-16で飛び回りエースになったサフォーノフ、1回の出撃で5機を撃墜した「即日エース」グリヤーエフ、タラーン・エースの一人であるコブザーン、「義足のエース」ソロキン、卓越した技術と統率能力で合計戦果が連合軍第四位のエースとなるモルーデルに撃墜されたシェスタコフなどドイツのエクスパルテン顔負けの連中がうじゃうじゃいます。もちリディア・リトヴァクみたいな女性エースがいるのはソ連空軍だけ。

本作では「ムルマンスクの星」ことサフォーノフが指揮しソロキンなどが所属する親衛第二戦闘連隊と「極北のエース」エールラーやワイセンベルガーの所属するII./JG 5およびIII./JG 5の戦いも書く予定。

Bf 109E

乗員：1名

全長：8.80m

翼幅：9.90m

発動機：ダイムラーベンツDB 601A

出力：1,100hp

空虚重量：2,053kg

最大速度：555km/h

航続距離：655 km

武装

M G F F 20 mm機関砲 × 1

M G 17 7.92 mm機銃 × 4

爆弾500 kgまで

バイエルン航空機製造株式会社のルッサー技師が開発したドイツの主力戦闘機。設計主任はルッサーにも関わらず、メッサーシュミットと言えばこれを差すというほど有名。E型は大戦初期の主力機として有名。1942年中ごろまで北方戦線にはBf109Eしかおらず、Bf109Fが現れるのはそれまで待たねばならなかった。生産数は軍用機史上二位の三万機以上。I1-2に次ぐ。

弱点としては足が弱く、着陸時などに折れやすいことと、航続距離が短いこと。

スペックはBf109E-3。たぶん、ムルマンスクに飛来するJG5の装備は落下増槽を装備できるE-7かE-8だったものと思われる。

Ju87 スツーカー

乗員：2名

全長：11.50 m

翼幅：13.80 m

発動機：ユンカース ユモ211J-1

出力：1,400 hp

空虚重量：2,810 kg

最大速度：410 km/h

航続距離：1,500 km

武装

M G 17 7.92 mm機銃 × 3

爆弾 1 / 800 kg まで

ルーデルで有名なドイツの主力急降下爆撃機。スツーカーは急降下爆撃機を示す Sturzkampfflugzeug の短縮形。

防弾性能は貧弱で損害も多かったが、名機であることに間違いは無い。

スペックは Ju 87 D - 1。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2695k/>

艦魂の歌 ??リバチー半島のかなた??

2011年1月7日06時54分発行